

A Round-Table with Prof. M. Shibata

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/24378



経済学との出会いと その後

柴 田 固 弘

藤 田 暁 男

(司 会) 碓 山 洋

藤田：経済学部長の藤田です。一言ご挨拶します。今年の学会大会が96年度経済学会大会の開催にあたりこれまでのものと大きく違っていると私が感じたところは、一つには理事を務めていただいている先生方の指導も非常に的確なものがありますが、学生諸君が非常によく働いているということです。ぜひこの伝統を今回の大会からつくっていただきたいと思います。もう一つは、今から始まる退官される先生方の講演会が冒頭に組み込まれたということです。後ほど簡単にご紹介をしますが、経済学の知的宝とも言える先生の話をお聞きになって、ぜひ今後の学習・研究に役立てていただきたいと思います。

経済学会大会の『20世紀を問う』という表題も大変思い切ったテーマだと思います。それでは、先生の人となりを私なりに簡単にご紹介します。

柴田固弘先生は金沢大学経済学部の中でも長い経歴をもった先生です。先生は実に40年以上にわたって国際価値論の研究をしてこら

れました。国際価値論では先生は代表的な論者のお一人です。先生と論争するのは恐らく日本の他の論者にとっては「恐ろしい、滅多なことでは言えない」というほどの非常に高いレベルに達しておられます。国際価値論という分野は、現在例えば我々は円高であるとか、円安であるとか言っていますが、その中の非常に基本的な議論を形成するわけで、国際価値の存在をベースにして特に先生が力を入れておられるのは貨幣と国際価値との関係です。これは非常に難しい。円高・円安の問題と直接関わっておられるわけですが、このような通貨価値の変動を規定する国際価値の変動プロセスの考察においてはどうしても貨幣のベーシックな問題というのにぶつかります。この問題を非常に深く研究されている先生です。その苦労話等も出てくると思います。

先生は大変お酒が好きで、私ももう少し若い頃には先生とよく飲みました。先生のお酒は大変楽しいお酒なのです。何が楽しいかという、だいたい8時頃から2時頃まで飲ん

でほとんど議論ばかりです。皆様は何が面白いかと思われるかもしれませんが、先生は飲むほどに頭がまわり、口がまわり、こういう人を私は今まで他に知らない。そういう奥深い国際価値論の議論がどういうものであるかを今日はじっくり味わっていただきたい。

司会：ありがとうございます。それでは早速記念講演をはじめます。まず、柴田固弘先生をお願いします。『経済学との出会いとその後』というテーマでお話いただけます。

柴田：この場を借りてまずお詫びします。先週火曜日の講義突然休講にしてすみません。実はその日葬儀に参列しました。兄弟子が亡くなりましたので急遽奈良まで行ってきました。

さて、ただいま、藤田先生からえらく持ち上げていただき、穴を探しておりました。今日のテーマは、『20世紀を問う』ということのようですが、私は先ほど紹介していただいたとおり、一筋の道という聞こえはよいのですが、研究に専念ということをお口にして、学内の催しごとに失礼ばかりしてまいりました。今日もこういう共通のテーマのあることをよくは承知しないままに、ノコノコとここに上ってきているわけです。ともかく、経済学を、しかもマルクスの立場でやってきた者にとりまして、20世紀は何であったかと問われることになりまして、その答えは、やはり社会主義の成立とその崩壊ということになると思います。また、この時期を生きた人間としては、二度の世界大戦つまり戦争の世紀であったと思います。さらにまた、日本人とい

うことであると、戦争に負けたその前後の価値の逆転といえますか、軍国主義から民主主義への急転回ということを思います。しかし、こういうテーマは私ごとき者が扱える代物ではありません。もっとふさわしい先生方の退官のさいのためにゆずりたいと思います。ともかく、『20世紀』ということにこじつけることにします。私が幸いにして21世紀に生きることができるとしましても、20世紀の方が長いことは言うまでもありません。そういう20世紀側の人間として自分の身近なところを振り返ってみるということにしてみたいと思います。

私はテレビはあまり見ないのですが、あるときNHKを見てみると、シルバー向けの講座をやっておりました。シルバーと若い人が付き合う方法という講座でした。若い人に嫌われない方法は何かということ、「昔のことを話さない、今のことと先のことを話題にする」ということでした。なるほどと思いました。私なども年長の人に酒の席などで延々と昔話をされて辟易するということがありました。ところが、いまはもう自分自身その加害者の側に回ろうとしているということに気がきました。ですから、私は日頃、過去は語らないということに努めています。ところが、今日は、こういう共通のテーマが掲げられていますので、いわば、おおっぴらに昔を語ることができるかと思います。ともかく、今日のために少し昔を振り返っておりましたが、日頃心掛けて昔を話題にしていなかったためでしょうか、実は頭の中から無くなっている部分が

多いことに気付きました。固有名詞が全然出てきません。忘れるはずのない固有名詞がなくなっています。これはもちろん歳のせいもあるわけでしょうが。

私の話したいことは「経済学との出会いとその後」ということであります。今日のためにあらかじめ出すように言われていた要旨を読み上げます。「経済学部入学以来46年、その間国際価値論一筋にやってきた。振り返ってみるとこの出会いは自然のなりゆきに近いものであった。その後、いわば、「虚化も一心」の思いでつきあいつづけてきた。退官を目前にして悔いるところはない。」こういうことをお話ししたいのであります。私は講義以外にこういうふうに話すことは初めてのことで、時間配分がうまくいくかどうか自信がありません。そこで、今日の筋書きをあらかじめお話ししておくわけであります。筋書きの横糸のひとつは「自然のなりゆき」ということです。それともうひとつは「虚化も一心」ということです。スポーツの監督ふうに言えば、「集中と継続」ということになりましょうか。これが大事なことだなと感じております。このふたつが横糸です。縦糸は、経済学との出会いとその後の経過を時間的に辿るということであります。

私のところは田舎なもので、旧制中学に行くのは数が少ないところでした。それなのに中学に行ったのはいじめなのです。私自身が最近の報道で伝えられるようないじめの対象になったということではないのですが、一種のいじめがありました。そういういじめから

逃げ出したかった。小学校のつぎは当時は高等小学校というのがあり、中学に行かないとなると、高等小学校に行かないといけな。そこではいじめが続く。逃げるためには中学へということで中学へ行った。まことに主体性のない話で、いわば自然のなりゆきでした。旧制中学の4年から第2水産講習所というところに入りました。今の下関水産大学です。第2水産講習所はもともと釜山にあったのですが、敗戦で引き上げてきたところが下関市の郊外で、そこは私の生まれ育った所のすぐ近所です。ここになぜ入ったかということこれも自然のなりゆきでした。私は五才年上の兄に養ってもらったという関係にあります。兄の言うには、上の学校にはとてもやれないけれども、今度隣町にやってきたあの水産講習所ならなんとかやってやれないこともないということで行かせてもらった。機関科、養殖科、漁労科のコースがあり、漁労科に入った。今は養殖の時代ですが、当時は漁労科というのは、南氷洋に行つて鯨をとってくる、時代の花形でした。しかし、ここは1年だけでやめてしまいました。前の中学はそのとき新制の高校になっていましたが、ここの3年生に戻ってきました。なぜやめたかということやはり自然のなりゆきです。体力的についていけなかったのです。その当時の水産講習所には陸士・海兵・予科練などから戻ってきた猛者連中もおり、私のような4年修了で、まだ体の小さい者にはとてもついて行けないと思ひやめたのです。しかし後でわかったことがあります。前の学校へ戻ってきて、通学のため

に山を越えるのですが、それを越えられなくなった。どうも変だということで病院へ行ったら十二指腸に寄生虫がいた。それでついて行けなかったのかなあと後でわかりました。もしあのまま進んでいれば、当時の友人たちのように、私も漁船か貨物船の船長になっていたかなと思います。

やめて戻って一年間猛勉強して山口大学経済学部に入った。そこでなぜ経済学部を選んだかということです。軍国主義から民主主義へ変わる、天皇の人間宣言があって世の中がまるで変わる、これは一体どういうことなのか疑問に思っておりました。兄が大学を中退して帰ってきましたが、その時に持ち帰った書物が少々ありました。文学部だったので主としてそういう関係のものばかりでしたが、その中に、雑誌の『世界』とか、『中央公論』などもありました。その中に私の疑問に答えるような記事・論文が載っており、どうも経済学というものが私の疑問に答えてくれるらしいと感じました。こういうわけで経済学部に入りましたが、教養課程の間は囲碁に凝っておりました。専門課程に進み、ゼミが岡倉伯士先生、それから外書講読が鈴木重靖先生でした。ゼミではロビンソンの『マルクス経済学批判』を読みました。外書はリカードの『原理』でした。当時両先生は論文を執筆中で、それは国際価値論争に参加されるためのものでした。ゼミが終わる、外書が終わる、まだ日が暮れてもいないのに、おでん屋、やきとり屋につれていかれました。論文の構想や内容をお話になる。私にわかるはずはない

のですが、なんとかかわからせようとしておられるように思った。これは皆さん思い当たるかも知れないが、何かをまとめようとするときには、机に向かうのも大事なのですが人に向かって話すということが非常に良い。話しているうちに自分の論理がつまる。それは欠陥があるということであり、反省して出直すということが必要になってくる。そういう意味の相手に私が選ばれたわけです。そういうことに大分後になって気がつきました。おかげさまで、酒の飲み方も少々鍛えられましたが、なによりもありがたく思いますのは、学問とか研究とかが、面白そうで、楽しそうだなという気持ちを抱く契機をいただいたということであります。こういうわけでありませうから、卒論のテーマはもちろん当然のなりゆきで国際価値論に関するものでした。

岡倉先生は、松井清先生と同門でしたし、また、鈴木先生は松井先生の門下生でしたので、研究の道を進むのなら、松井研究室へ行けということで行きました。私としては、国際価値論をやるつもりでしたが、そういうわけにはいきませんでした。当時、松井研究室の共同研究のテーマは後進国開発理論の研究でしたし、そのつぎのテーマは近代日本貿易史の研究でした。大学院を修了してから、山口大学で日本経済論を担当しておりましたが、金沢大学で国際経済論が担当できるということでこちらにきました。その頃松井先生からコールマイの『国際価値論』を読んでみたらどうかという示唆がありました。そこで、初心というか、学生時代に抱いたテーマに本格

的取り組むことにしました。しかし、そうしたからといって、もちろんすぐに成果が出るわけではありません。国際価値論争の重要な論点として貨幣価値の問題がありますが、この問題についていろいろの人がいろいろなことを言っています。代表的なものとして、いわゆる基軸説といわゆる平均説があります。講義で困るのは、これこれの説があると紹介はできるけれども、それではお前の考えはどうなのかと聞かれたときに答えようがないということです。紹介するだけというのは情けない話で、毎年困るわけです。私は、あの核心部分、つまり『資本論』第20章に直接ぶちあたっても私の能力ではとても解けそうにない。しかし、従来の先生方がおっしゃっていることも納得できない。だから、最終的には第20章を目標にするのだが、さしあたりその周辺から迫ろうということにしました。周辺というのは、貿易の超過利潤実現というテーマです。これなら何とか自分なりに解けるかもしれないということで、ここから迫ることにしました。そのために、名和先生や木下先生の論文をその観点から取り上げました。

こういうわけで、私としては片隅でコツコツやっているだけだと思っていたのですが、名和批判のものを書いたときにびっくりしたことがあります。抜き刷りをそんなに多くもない関係者に送り出したときのことで、ふと気がついたのです。ご本人に対してはどうしたらいいのか、と。私のような若輩が書いたものを読んでもいただけるはずがないと思うのですが、だからといって、批判はしておき

ながら当のご本人に送らないのも変な話だと思ひまして、とにかく郵送することになりました。そんなわけですっかり忘れていたのですが、名和先生から丁寧な礼状をいただき、本当にびっくりしました。内容は、「現役でバリバリやっている人が羨ましい。最近風邪をこじらせ入院している、退院したらぜひ遊びにきてくれ」という趣旨のことが書いてありました。ところが、先生はそれから2、3ヶ月してお亡くなりになりました。その前後関係ははっきりしませんが、その当時そういうことでやっていた研究をいろいろな方から注目していただきました。海野さんが私の研究を取り上げてくださって、「柴田の言うことは必ずしも間違いではない。」ということで、数式を使って検討していただきました。同じような観点から本山さんにも取り上げていただきました。その他いろいろな方が取り上げて下さいました。とりわけ、木下先生は論文ひとつを「柴田固弘氏の批判に答える」という副題をつけて書いて下さった。また、それと前後して、木原先生は、「柴田固弘は間違っている」ということで、論文ふたつを書いて下さった。片隅のテーマを勝手にやっていたわりには皆様に取り上げていただき、本当にありがたいことだと思っています。根気よくやっていたらいつかは報われるものだとその時強く感じました。しかし、私としてはまだまだ外堀を埋めただけです。当時は、第20章の第2段落と第3段落をやっとなんとか理解できた時点でした。木下先生の反批判の核心は、国際価値論で一番肝心なことは第

20章第4段落にある、それなのに柴田はそれをやらないでにおいて、他のところでいろいろ発言しているが、それでは困難な問題を選んでいることになるではないか、というもののように私には受け取れました。私としては、なんとしてもいよいよ本丸にとりかからねばと思いました。

このようにして、ずっと暖め続けてきたテーマをやっと今度の論文で発表できることになりました。すなわち、貨幣価値の国民的相違について、柴田説を提出できるところにこぎつけました。こういうわけで「虚化も一心」

というわけです。実は、ずっと「虚化の一念」だとおぼえていたのですが、今回念のために『広辞苑』に当たりましたところ、「虚化も一心」とありました。愚か者も一生懸命やりつづければ、いつか優れたことをなし遂げることができる、という意味だとあります。私のやったことが優れたことであるかどうかは別にして、自己満足だけは得られたということで、「退官を目前にして悔いるところはない」というわけであります。

どうもありがとうございました。